

# Aconnect 新機能「技術探索・特許調査エージェント」に関する包括的分析レポート

Gemini

## エグゼクティブサマリー

2025年10月30日、ストックマーク株式会社は、製造業向けAIエージェント『Aconnect』の新たな機能として、「技術探索エージェント」および「特許調査エージェント」の提供を開始した<sup>1</sup>。この機能拡張は、同社がこれまで提供してきた情報収集・集約サービスから、専門性の高い知的業務そのものを自動化するソリューションへと戦略的に進化する上で、極めて重要な一步を示すものである。

本レポートでは、これらの新機能が日本の製造業が直面する構造的課題に対して、いかにして具体的な解決策を提供するのかを多角的に分析する。日本の製造業の研究開発（R&D）現場は、熟練技術者の高齢化に伴う「知の継承」の断絶と、複雑化・膨大化する情報環境下での「開発サイクルの遅延」という二つの深刻な危機に瀕している<sup>2</sup>。今回発表されたAIエージェントは、これらの課題、すなわち「属人化の解消」と「調査工数の削減」に正面から取り組むことを目的として設計されている<sup>2</sup>。

「技術探索エージェント」は、独自のロジックツリー型UIを通じて、課題解決に向けたアプローチを網羅的かつ構造的に提示する。一方、「特許調査エージェント」は、開発予定技術の構成要素をAIが自動で抽出し、関連特許との整合性を評価することで、開発初期段階のリスクを低減させる<sup>2</sup>。これらの機能は、ストックマークが独自に開発したビジネス特化型の日本語大規模言語モデル（LLM）と、非構造化データを知識化する基盤技術「Stockmark A Technology (SAT)」によって支えられており、汎用AIツールとは一線を画す高い専門性と精度を実現している<sup>6</sup>。

結論として、これらの新機能は単なるツール追加ではなく、AconnectをR&Dライフサイクル全体を支援する不可欠な「AIコパイロット」へと昇華させる戦略的布石である。AIを単なる検索ツールとしてではなく、複雑で高価値な認知的作業における協調的パートナーとして位置づけるこのパラダイムシフトは、企業のイノベーションプロセスそのものを再定義する潜在能力を秘めている。R&Dリーダーは、本ソリューションを単なる効率化ツールとして評価するに

留まらず、専門家レベルの研究能力を組織内に民主化し、開発サイクルを根本から変革する戦略的資産として導入を検討すべきである。

---

## 1. イノベーションの要請：製造業 R&D における構造的課題への対応

ストックマークが今回発表した AI エージェントの真価を理解するためには、まずその背景にある日本の製造業が抱える深刻かつ構造的な課題を深く掘り下げる必要がある。これらのエージェントは、単なる技術的進歩の産物ではなく、長年にわたり R&D 現場を蝕んできた「知の継承」と「時間の制約」という二重の危機に対する直接的な回答として開発されたものである。

### 1.1. 知と時間の二重危機

#### 1.1.1. 「専門知の崖」：技術継承の断絶

日本の製造業は、長らくその競争力の源泉を熟練技術者の深い経験と暗黙知に依存してきた。しかし、少子高齢化の進展により、これらのベテラン技術者が一斉に退職期を迎え、彼らが長年培ってきた調査ノウハウや問題解決の勘所といった無形の知的資産が急速に失われつつある<sup>3</sup>。この現象は「専門知の崖」とも言うべき深刻な事態であり、組織的な技術力の低下を招いている。

この問題の核心は、高度な調査業務が特定の個人のスキルに依存する「属人化」である。若手技術者は、経験豊富な先輩から直接指導を受ける機会が減少し、質の高い調査を独力で遂行することが困難になっている<sup>4</sup>。結果として、組織全体としての調査品質にばらつきが生じ、標準化された開発プロセスの構築を阻害している<sup>10</sup>。ストックマークの新機能が掲げる「ベテラン依存からの脱却」という目標は、まさにこの構造的課題への挑戦であり、AI によって熟練者の思考プロセスをモデル化し、組織全体で共有可能な形式知へと変換することを目指している<sup>2</sup>。

このアプローチは、単に調査が遅いという問題を解決するだけでなく、より本質的な課題に取

り組んでいる。高品質な調査を遂行する能力そのものが、ベテラン技術者という希少でスケール不可能なリソースに依存しているという現実がある。技術探索におけるロジックツリーUIや、特許調査における構成要素の自動抽出といった機能は、熟練者の複雑な思考ロジックをAIエージェントに組み込む試みである<sup>2</sup>。これにより、Aconnectは単なる時間節約ツールから、組織学習と若手人材のスキルアップを促進するメカニズムへと変貌する。これは、日本の製造業が直面する「技術伝承」の危機に対する、具体的かつ強力な処方箋となり得る<sup>3</sup>。

### 1.1.2. 「作業」の重荷：コア業務への圧迫

R&Dの現場では、高度な専門知識を持つ技術者が、本来注力すべき実験や試作、創造的な問題解決といった高付加価値業務ではなく、その前段階にあたる膨大で時間のかかる調査業務に忙殺されているという現実がある<sup>2</sup>。特に、先行技術調査やクリアランス調査といった特許関連業務は、その典型例である。外部の専門機関に委託した場合、1件あたり数十万円から数百万円の費用と、2週間から4週間という長い期間を要することも珍しくない<sup>11</sup>。これを内製化しようとしても、専門的なスキルセットが必要であり、結果的に技術者の貴重なリソースを大きく圧迫することになる。

このような状況は、イノベーションの速度を著しく低下させるボトルネックとなっている。技術者が調査という「作業」に時間を費やすほど、新しいアイデアを試したり、プロトタイプを改良したりする時間が奪われる。ストックマークの新機能は、この非効率な現状を打破し、技術者を本来の創造的な業務に解放することを直接的な目的としている<sup>2</sup>。

## 1.2. データ奔流とR&Dのボトルネック

### 1.2.1. 情報過多というジレンマ

現代のR&D環境は、学術論文、特許公報、技術ニュース、市場レポート、そして日々蓄積される社内文書といった、多様かつ膨大な情報の奔流に晒されている<sup>1</sup>。これらの情報を人手で網羅的に収集し、統合的に分析・評価することは、もはや物理的に不可能である。その結果、重要な技術動向や競合の動きを見落とし、ビジネスチャンスを逸したり、予期せぬリスクに直面したりするケースが増加している<sup>2</sup>。

### 1.2.2. 汎用ツールの限界

一般的な検索エンジンや、近年急速に普及した生成 AI は、情報収集の一助とはなるものの、製造業の R&D のような専門性の高い領域では限界がある。これらのツールは、専門用語の深い文脈理解に乏しく、技術文書に頻出する複雑な図表やグラフを正確に解釈することができない<sup>3</sup>。また、特許調査や技術探索といった特定の業務フローに最適化されていないため、効率的な調査を妨げる要因ともなり得る。この現実は、Aconnect のような業界・業務特化型 AI の必要性を強く裏付けている。

この状況において、2025 年 10 月という新機能のリリース時期は、極めて戦略的であると言える。日本の産業界で広く認知されている「2025 年の崖」とは、老朽化したレガシーアイティシステムと技術者不足に起因する経済的損失が懸念される問題である<sup>8</sup>。ストックマークは、この問題意識が社会的に最高潮に達するタイミングに合わせて、「属人化解消」や「DX 推進」といったキーワードを前面に押し出したソリューションを市場に投入した<sup>1</sup>。これは単なる製品リリースに留まらず、企業の経営層が抱える喫緊の課題意識に的確に応える、計算されたマーケティング戦略である。

---

## 2. プロバイダーのプロファイル：ストックマークの技術的基盤

Aconnect の新機能が持つ革新性を評価する上で、その開発元であるストックマーク株式会社の企業としての軌跡と、それを支える中核技術を理解することは不可欠である。同社は単に外部の AI 技術を応用しているのではなく、基礎となる大規模言語モデル（LLM）から、専門業務を遂行する AI エージェントに至るまで、一気通貫した技術スタックを自社で構築している。この垂直統合こそが、同社の競争優位性の源泉となっている。

### 2.1. 企業の軌跡とビジョン

2016 年に林達 CEO によって設立されたストックマークは、「価値創造の仕組みを再発明し、人類を前進させる」という壮大なミッションを掲げる AI SaaS スタートアップである<sup>1</sup>。創業

以来、同社は特に日本の基幹産業である製造業に注力しており、現在では 300 社を超える顧客基盤のうち約 7 割を製造業の大手企業が占めている<sup>16</sup>。

同社は、産業特化型 AI モデルの開発を軸に、2029 年度までに売上高 100 億円を達成するという野心的な成長目標を掲げている<sup>14</sup>。この目標達成に向けた戦略の中核に位置づけられているのが、今回のような専門性の高い AI エージェントの開発であり、これは同社の長期的な事業戦略に深く根差したものであることがわかる。また、三菱 UFJ キャピタルなどを引受先とするシリーズ B ラウンドで 10 億円超の資金調達を成功させるなど、その技術力と事業戦略は市場からも高く評価されており、独自の LLM 開発のような長期的かつ大規模な研究開発を継続できる強固な財務基盤を確立している<sup>17</sup>。

## 2.2. 中核技術スタック：単なる AI ラッパーを超えて

ストックマークの最大の強みは、その技術的な深さにある。多くの AI アプリケーション企業が外部の汎用 LLM（例：GPT、Claude）の API を利用してサービスを構築する中、同社は技術スタック全体を自社でコントロールする垂直統合モデルを採用している。

### 2.2.1. 独自開発の大規模言語モデル（LLM）

同社は、経済産業省所管の NEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）による「GENIAC」プロジェクトにも採択されるなど、国からの支援も受けながら、ビジネス用途に特化した日本語 LLM の開発に多大な投資を行っている<sup>6</sup>。その代表例が、1,000 億パラメータ規模を誇る視覚言語モデル「Stockmark-2-VL-100B」である<sup>6</sup>。自社で LLM を開発・保有することにより、以下のような決定的な優位性を確保している。

- **高い精度と信頼性:** ビジネスや技術に関する大量の日本語テキストで事前学習を行うことで、専門的な文脈を深く理解し、汎用 LLM で問題となるハルシネーション（事実に基づかない情報の生成）を大幅に抑制する<sup>3</sup>。
- **ドメイン特化の最適化:** 製造業の専門用語や特有の表現に最適化されており、より的確な情報抽出と分析が可能となる。
- **コストとパフォーマンスの最適化:** 自社プロダクトに最適な形で LLM の学習と推論を実行できるため、クラウドサービスを利用する場合と比較してコスト効率と処理速度を両立できる<sup>7</sup>。

## 2.2.2. 基盤プラットフォーム「Stockmark A Technology (SAT)」

SAT は、専門的な業務を遂行する AI エージェントを構築するための基盤となるプラットフォームである<sup>6</sup>。Aconnect の新機能は、この SAT が持つ高度なデータ処理能力の上に成り立っている。

- **非構造化データの構造化:** SAT の核心技術は、PDF や PowerPoint といった、AI が直接利用しにくい「非構造化データ」を、意味のある構造化データへと自動的に変換する能力にある。独自の「レイアウト抽出モデル」は、単なる文字列としてではなく、文書のレイアウトや文脈を理解して情報を抽出するため、高い精度を誇る<sup>6</sup>。
- **図表・グラフの理解:** 技術文書の読解において極めて重要な、図や表、グラフの内容を AI が理解し、テキストによる説明を自動生成する。これにより、従来は人間が目で見て判断するしかなかった視覚情報を、検索や分析の対象とすることが可能になる<sup>6</sup>。
- **ナレッジグラフの自動生成:** 抽出・構造化されたデータから、概念間の関係性を意味的につなぎ合わせた「ナレッジグラフ」を自動で構築する。これにより、単純なキーワード検索では発見できないような、情報間の隠れた関連性を見つけ出し、より高度な推論や探索を AI が行えるようになる<sup>6</sup>。

この技術スタックの垂直統合は、ストックマークにとって強力な競争上の防壁となっている。基礎となる LLM からデータ処理基盤、そして最終的なアプリケーションである AI エージェントまでを一貫して自社で開発することで、各層が緊密に連携し、製造業 R&D という特定のドメインにおける課題解決能力を最大化している。これは、汎用的なツールを組み合わせるだけでは決して到達できないレベルのパフォーマンスと価値を提供する。

さらに、SAT の機能として言及されている「SAT Agent Cockpit」は、ユーザー自身が専門知識やデータセットを実装し、独自の AI エージェントを設計・運用できる機能である<sup>6</sup>。これは、ストックマークの将来的なロードマップを示唆している。同社の最終的なビジョンは、完成品の AI エージェントを販売するだけでなく、企業が自社のトップ専門家の知見を「クローン」化し、様々な知的業務に対応するカスタム AI エージェント群を構築するためのプラットフォームを提供することにあると考えられる。このビジョンが実現すれば、Aconnect は単なる製品から、企業のデジタルトランスフォーメーションを駆動する戦略的基盤へと進化するだろう。

---

## 3. 新 AI エージェントの詳細分析

今回リリースされた二つの AI エージェントは、それぞれが R&D プロセスの異なる、しかし密

接に関連するフェーズをターゲットとしている。その機能と設計思想を深く分析することで、ストックマークが技術者の認知プロセスをいかに理解し、AIによってそれを拡張しようとしているかが見えてくる。

### 3.1. 技術探索エージェント：課題から解決策の網羅的探索へ

#### 3.1.1. コア機能とワークフロー

このエージェントは、R&D の最も初期段階である「技術課題の解決アプローチ探索」を自動化する<sup>2</sup>。ユーザーが解決したい技術的な課題を入力すると、AI は膨大な情報源（学術論文、技術ニュース、特許、社内文書など）を横断的に解析し、解決策となりうるアイデアを複数提案する<sup>1</sup>。これにより、従来は担当者の知識や経験に大きく依存していたアイデア創出のプロセスを、データ駆動型で体系的なものへと変革する。

#### 3.1.2. 最大の差別化要因：ロジックツリー型 UI

本エージェントの最も注目すべき特徴は、そのユーザーインターフェースにある。AI が提案する解決策は、単なる箇条書きのリストではなく、「ロジックツリー型」の構造で可視化される<sup>2</sup>。これは、一つの大きな課題を複数のサブ課題に分解し、それぞれに対する具体的な解決アプローチを枝分かれさせて表示する形式である。

この UI 設計は、技術者にとって極めて重要な価値を持つ。

- **網羅性の確保:** 異なる技術的アプローチや視点を体系的に整理して提示するため、検討漏れを防ぎ、より包括的な解決策の探索を可能にする。
- **思考の構造化:** 複雑な問題の全体像と、各解決策間の関係性を直感的に把握できるため、ユーザー自身の思考を整理し、深める助けとなる。
- **対話的な探索:** ユーザーは特定の分岐（ブランチ）を深掘りしたり、別の視点からの分析を AI に指示したりすることができる。用意された「対話するテンプレート」の存在は、このエージェントが一方的な情報提供ツールではなく、ユーザーとの対話を通じて解決策を共に練り上げる協調的なパートナーとして設計されていることを示唆している<sup>2</sup>。

このロジックツリーUIは、熟練したエンジニアがホワイトボード上で問題を体系的に分解していく思考プロセスを、ソフトウェア上で再現する試みと言える。これにより、AIとのインテラクションは、単なる質疑応答から、構造化された戦略的なブレーンストーミングセッションへと昇華される。

## 3.2. 特許調査エージェント：開発のデリスキングと加速

### 3.2.1. コア機能とワークフロー

このエージェントは、製品開発において不可欠でありながら、極めて専門性と労力を要する先行技術調査やクリアランス調査（他社特許侵害予防調査）の一部を自動化する<sup>2</sup>。そのワークフローは以下の通りである。

1. ユーザーが開発を計画している技術の概要を入力する。
2. AI がその内容を解析し、調査すべき技術的な「構成要素」を自動で抽出する。
3. 抽出された構成要素に基づき、関連する特許を検索し、開発技術との「整合性の度合い」を評価する。
4. AI は評価の根拠を明示し、プロセスの透明性を確保する。
5. 最終的な結果は、人間による詳細な調査が必要な特許をハイライトする、直感的な UI で提示される<sup>2</sup>。

### 3.2.2. 最大の差別化要因：構成要素の自動抽出

特許調査における最大の難関の一つは、調査対象となる発明を、検索に適した複数の技術コンセプト（構成要素）に分解し、適切な検索式を構築する作業である<sup>10</sup>。このプロセスは、技術と特許制度の両方に精通した専門家の経験とノウハウに大きく依存しており、属人化の最大の要因となっていた。

本エージェントがこの「構成要素の自動抽出」を AI によって実現したことは、画期的なブレイクスルーである。これにより、調査プロセスの中で最も高度なスキルを要する部分が自動化され、若手技術者でも専門家レベルに近い精度で初期調査を行うことが可能になる。これは、単なる時間短縮を超え、組織全体の特許調査能力の底上げに直結する。

このエージェントの導入により、企業は「調査工数の効率化」と「開発頓挫／特許リスクの検知」という二つの大きな効果を期待できる<sup>2</sup>。開発の極めて早い段階で、低コストかつ迅速に潜在的な特許リスクを洗い出すことができるため、致命的な手戻りや将来的な訴訟リスクを回避し、より確度の高い開発テーマにリソースを集中させることが可能になる。

これら二つのエージェントは、独立して機能するだけでなく、R&D プロセスの初期段階を網羅する、強力な相乗効果を生み出すように設計されている。まず、研究者は「技術探索エージェント」を用いて、ある課題に対する有望な技術的アプローチを網羅的に洗い出す。そして、その中から最も有望な方向性が定まった段階で、即座に「特許調査エージェント」を起動し、そのアプローチに関する先行特許のクリアランス調査を実施する。

この「アイデア創出→IP 検証」という一連のサイクルは、従来であれば数週間から数ヶ月を要していたが、Aconnect 上では数時間から数日で完了する可能性がある。この劇的なスピードアップは、R&D のあり方を根本から変える。企業はより多くのアイデアを、より低いコストで、より迅速に検証できるようになり、イノベーションの成功確率を飛躍的に高めることができる。Aconnect は、二つの独立したツールを提供するのではなく、R&D 初期段階のための統合されたワークベンチを提供することで、市場における独自の価値を確立している。

---

## 4. 期待されるインパクト：R&D チームの変革

Aconnect に搭載された新しい AI エージェントは、単なる業務効率化ツールに留まらず、R&D 組織の働き方、能力、そして成果の質そのものを変革するポテンシャルを秘めている。そのインパクトは、現場で作業する個々の技術者から、組織全体の戦略を司る経営層まで、多岐にわたる。

### 4.1. 技術者・研究者個人への効果

- **抜本的な工数削減:** これまで数日から数週間を要していた技術探索や特許の初期調査といった煩雑な業務が、AI エージェントによって大幅に短縮される<sup>2</sup>。これにより創出された時間は、技術者が本来の専門性を発揮すべき、より創造的で付加価値の高い業務に再配分される。
- **アウトプット品質の向上:** AI は人間が見落としがちな情報や、専門外の領域にある関連技術を網羅的に探索する。これにより、調査の抜け漏れが減り、初期検討の質が向上する<sup>2</sup>。結果として、より頑健で競争力のある研究開発テーマの立案につながる。

- **コア業務への集中:** 調査という付加価値の低い「作業」から解放されことで、技術者は実験、試作、データ解析、そして何よりも新しいアイデアを生み出すための創造的思考といった、イノベーションの源泉となるコア業務に集中できる環境を手に入れることができる<sup>2</sup>。

## 4.2. マネジメント・組織全体への効果

- **属人性の解消と組織能力の向上:** AI エージェントが熟練技術者の持つ高度な調査プロセスを支援することで、経験の浅い若手技術者でもベテランに近いレベルの調査を遂行できるようになる<sup>2</sup>。これは、特定の個人への依存リスクを低減すると同時に、組織全体の技術的基盤を強化し、持続的な成長を可能にする。
- **技術開発サイクルの高速化:** R&D プロセスの中で最も時間がかかり、不確実性の高かった初期の調査フェーズが短縮されることで、研究開発全体のリードタイムが劇的に短くなる<sup>2</sup>。これは、製品やサービスを競合他社に先駆けて市場に投入するための、決定的な競争優位性となる。
- **戦略的なリスク管理:** 特許調査エージェントは、開発の初期段階で潜在的な知的財産リスクを低コストで検知する早期警戒システムとして機能する<sup>2</sup>。これにより、多額の投資を行った後に開発が頓挫したり、訴訟に巻き込まれたりするリスクを未然に防ぎ、より効果的な知財戦略の立案を支援する。

これらの価値をステークホルダーごとに整理すると、以下の表のようにまとめることができる。この表は、各部門が直面する具体的な課題に対し、Aconnect の新機能がどのように作用し、最終的にどのようなビジネスインパクトをもたらすかを明確に示している。

表 1: Aconnect AI エージェントの提供価値

カテゴリ (ステークホルダー)	従来の課題	Aconnect エージェントによる解決策	具体的なビジネスインパクト
研究者・技術者	数週間に及ぶ手作業での情報収集と分析。見落としのリスク。	AI による技術探索と特許調査の自動化。ロジックツリーによる網羅的なアイデア提示。	・調査時間を 90% 以上削減 ・実験や試作などコア業務への集中

			<ul style="list-style-type: none"> <li>より質の高い研究開発テーマの立案</li> </ul>
<b>R&amp;D マネージャー</b>	メンバー間の調査品質のばらつき。プロジェクトの遅延。	標準化された高品質な調査プロセスの提供。調査フェーズの劇的な短縮。	<ul style="list-style-type: none"> <li>開発リードタイムの短縮による市場投入の迅速化</li> <li>予測可能で安定したプロジェクト進行</li> </ul>
<b>知財・法務部門</b>	高額な外部特許調査費用。開発後期での知財リスク発覚。	内製可能で低成本な初期段階でのリスク検知。構成要素の自動抽出による高精度な調査。	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部委託費用の大幅な削減</li> <li>手戻りや訴訟リスクの低減</li> <li>プロアクティブな知財戦略の立案</li> </ul>
<b>CTO・R&amp;D 責任者</b>	熟練技術者の退職に伴う知の喪失。組織全体のイノベーション速度の低下。	熟練者のノウハウをAIで形式知化し、組織全体で共有。アイデア創出からIP検証までのサイクルの高速化。	<ul style="list-style-type: none"> <li>組織的な技術力の維持・向上</li> <li>全社的なイノベーション能力の強化</li> <li>競争優位性の確立</li> </ul>

## 5. 競合ポジショニングと市場における差別化

Aconnect の新機能は、既存の AI ツール市場において独自のポジションを確立している。その競争優位性を理解するためには、「特許調査特化型 AI ツール」と「汎用生成 AI ツール」という二つの主要な競合カテゴリーと比較分析することが有効である。

### 5.1. Aconnect vs. 特許調査特化型 AI ツール

### 5.1.1. 競合環境

市場には、AI を活用して特許調査の効率化・高度化を図る専門ツールが多数存在する。代表的なものとして、AI による類似検索や分類予測機能を提供する **Patentfield**<sup>20</sup>、自然文検索や AI スコアによるランク付けが可能なパナソニックの **PatentSQUARE**<sup>21</sup>、そして文章ベースでの AI 検索や明細書ドラフティング機能を持つ **Tokkyo.Ai**<sup>22</sup> などが挙げられる。これらのツールは、特許調査業務そのものにおいては非常に強力な機能を提供している。

### 5.1.2. Aconnect の差別化要因

これらの専門ツールと比較した際、Aconnect は以下の点で明確な差別化を図っている。

1. **統合されたワークフロー:** Aconnect の最大の強みは、特許調査を技術探索とシームレスに統合している点にある。競合ツールが主に「既知の発明」に対する調査を支援するのに対し、Aconnect は「未知の解決策」を探すアイデア創出の段階から R&D プロセスを支援する。この「探索から検証まで」を一気通貫でカバーする統合プラットフォームは、他に類を見ない。
2. **広範なデータソース:** 競合ツールが特許データベースを中心とした情報源に特化しているのに対し、Aconnect は特許情報に加えて、学術論文、技術ニュース、市場レポート、さらには社内文書まで、より広範なデータソースを解析対象としている<sup>1</sup>。これにより、技術的な側面だけでなく、市場ニーズや競合動向といった多角的な視点から、より文脈豊かなインテリジェンスを提供することが可能となる。
3. **独自 LLM による基盤技術:** 前述の通り、ストックマークが独自に開発したビジネス・技術特化型の日本語 LLM は、競合他社が汎用モデルを利用している可能性と比較して、根本的な性能優位性をもたらす。専門用語の深い理解や、複雑な技術概念の正確な解釈において、その差は顕著に現れると考えられる。

## 5.2. Aconnect vs. 汎用生成 AI ツール

### 5.2.1. 競合環境

ChatGPT、Claude、Gemini といった汎用生成 AI は、その手軽さと多機能性から、研究開発における情報収集や要約、アイデア出しといった用途で広く利用され始めている<sup>24</sup>。

### 5.2.2. Aconnect の差別化要因

これらの汎用ツールに対して、Aconnect は以下の点で決定的な優位性を持つ。

1. **ドメイン特化性と信頼性:** 汎用 AI は、時に事実に基づかない情報を生成する「ハルシネーション」のリスクを内包しており、その回答の信頼性は保証されない<sup>3</sup>。特許や技術開発といった、正確性が絶対的に求められる領域において、これは致命的な欠点である。Aconnect は、信頼性の高い情報源に限定したデータに基づき回答を生成する RAG (Retrieval-Augmented Generation) アーキテクチャを採用しており、このリスクを最小限に抑えるよう設計されている<sup>27</sup>。
2. **業務特化型の UI/UX:** 汎用 AI が提供するのは、基本的にシンプルなチャットインターフェースのみである。一方、Aconnect は「ロジックツリー」や「特許リスクの可視化」といった、特定の業務フローに合わせて最適化された専用の UI を提供する<sup>2</sup>。これにより、ユーザーはより直感的かつ効率的にタスクを遂行することができる。
3. **エンタープライズレベルのセキュリティ:** 企業の将来の製品戦略や未公開の技術情報といった機密性の高い情報を、外部のパブリックな AI サービスに入力することは、重大なセキュリティリスクを伴う。ストックマークは、ISO/IEC 27701 (プライバシー情報マネジメントシステム) の認証を取得するなど、エンタープライズ利用を前提とした高度なセキュリティ体制を構築しており、企業が安心して利用できる環境を提供している<sup>27</sup>。

これらの分析から導き出されるのは、Aconnect が既存の市場カテゴリーに収まらない、新たな市場を創造しようとしているという点である。現在、市場は「特許調査ツール」「市場情報プラットフォーム」「汎用 AI アシスタント」といった形で断片化している。しかし、R&D の初期段階、すなわち市場動向の分析、技術的解決策のブレーンストーミング、そして知的財産権の検証という一連のプロセスを、単一のプラットフォーム上で統合的に支援するツールは存在しなかった。ストックマークは、既存の情報サービスと今回の専門エージェントを組み合わせることで、この「統合型 R&D インテリジェンス・プラットフォーム」という新しいカテゴリーを開拓している。その競争優位性は、個々の機能の優劣だけでなく、これら全てを連携させることによって生まれる相乗効果にある。

---

## 6. 戦略的意義と将来展望

Aconnect の新機能リリースは、ストックマーク自身の戦略的進化を示すと同時に、今後の R&D のあり方そのものに大きな影響を与える可能性を秘めている。本セクションでは、この動向が持つ戦略的な意義と、将来の展望について考察する。

## 6.1. ストックマークの戦略的進化

今回の機能拡張は、ストックマークが「情報提供」サービスから「専門業務の自動化」プラットフォームへと、その事業の中核を明確にシフトさせたことを示している。同社の初期のプロダクトである「Anews」や「Astrategy」は、主に外部情報の収集・整理・可視化を通じて、ユーザーの意思決定を支援するものであった<sup>17</sup>。これに対し、新しい AI エージェントは、技術探索や特許調査といった、従来は高度な専門家が担ってきた知的業務プロセスそのものに深く介入し、自動化する。

これは、バリューチェーンを遡り、よりクリティカルで付加価値の高い企業活動をターゲットにする戦略的な動きである。大手企業の不可欠なパートナーとなることを目指す同社のビジョンとも完全に一致しており<sup>14</sup>、顧客との関係を単なるツール提供者から、イノベーションプロセスに深く関与する戦略的パートナーへと昇華させることを狙いとしている。

## 6.2. R&D の未来：AI コパイロットの台頭

これらのエージェントは、知的労働の未来像を具体的に示す好例である。そのモデルは、技術者を「代替」するのではなく、「拡張（オーグメント）」することにある。すなわち、人間が最も価値を発揮できる創造性、批判的思考、戦略的意思決定といった領域に集中できるよう、時間のかかる煩雑な業務を AI が引き受けるという協業モデルである。この「人間参加型（Human-in-the-Loop）」のアプローチは、エンタープライズ領域における AI 活用の最も現実的かつ強力なパラダイムであり、今後の R&D における標準的な働き方となっていく可能性が高い。

## 6.3. 導入における潜在的課題と推奨事項

Aconnect の新機能が持つポテンシャルを最大限に引き出すためには、技術的な導入だけでなく、組織的な変革も必要となる。

- **既存システムとの連携:** 導入を検討する企業は、Aconnect を既存の R&D ワークフロー や PLM (製品ライフサイクル管理) システム、社内のナレッジマネジメント基盤とどのように連携させるかを計画する必要がある。
- **組織文化の変革:** 最大の障壁は、技術的なものではなく文化的なものである可能性がある。R&D チームが AI を信頼し、効果的に協業するためのトレーニングとマインドセットの転換が不可欠である。経営層は、この変革を主導し、積極的に支援する必要がある。
- **導入検討企業への推奨事項:** 全社一斉導入ではなく、特定の R&D チームでパイロットプロジェクトを開始する段階的なアプローチが推奨される。artience 社、レゾナック社、TDK 社といった既存の導入事例を参考に<sup>29</sup>、調査時間の削減率、検討された新規アイデアの数、特許リスクの早期発見件数といった具体的な指標を用いて成功を測定し、その成果を基に展開範囲を拡大していくことが望ましい。

最後に、これらの AI エージェントの成功は、ストックマークにとって極めて強力なデータファードバックループを生み出す可能性がある。何千人の専門技術者がこれらのエージェントを利用する中で、彼らが行う質問、価値を見出す解決策、重要だと判断する特許といったインタラクションデータは、「専門家の判断」に関する他に類を見ない貴重なデータセットとなる。ストックマークは、この匿名化されたデータを活用して自社の LLM をさらにファインチューニングし、エージェントの性能を継続的に向上させることができる。

これは、優れた製品がより多くの専門家ユーザーを惹きつけ、その利用データが製品をさらに改良し、競争優位性を拡大するという、典型的な「データネットワーク効果」である。この好循環が確立されれば、ストックマークは R&D インテリジェンスの領域において、他社が追随困難な地位を築くことになるだろう。

## 引用文献

1. 製造業特化の AI エージェント機能で工数削減 / 属人化解消を実現 専門業務を自動化する「技術探索/特許調査エージェント」を『Aconnect』に新搭載 - PR TIMES, 11月 2, 2025 にアクセス、  
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000314.000024407.html>
2. 製造業特化の AI エージェント機能で工数削減 / 属人化解消を実現 専門 ..., 11月 2, 2025 にアクセス、 <https://stockmark.co.jp/news/20251030>
3. 製造業の生成 AI 活用の事例と課題 – 社内ナレッジ共有・技術伝承の解決策となる独自 AI とは, 11月 2, 2025 にアクセス、  
[https://kibit.fronteo.com/solution/manufacture\\_gai](https://kibit.fronteo.com/solution/manufacture_gai)
4. 製造業における技術伝承の課題と解決策 | 株式会社 日立ソリューションズ・クリエイト, 11月 2, 2025 にアクセス、 [https://www.hitachi-solutions-create.co.jp/column/management\\_strategy/technology\\_transfer.html](https://www.hitachi-solutions-create.co.jp/column/management_strategy/technology_transfer.html)

5. 製造業の工場における課題とは？その解決策としての最新自動化技術活用法も合わせて解説, 11月2,2025にアクセス、<https://www.ricoh.co.jp/service/digital-manufacturing/media/article/detail64>
6. 業務AIの実装支援プラットフォーム「SAT」 | ストックマーク株式会社, 11月2,2025にアクセス、<https://sat.stockmark.co.jp/>
7. ストックマーク株式会社 LLM 開発用GPU導入事例 - ニューテック, 11月2,2025にアクセス、<https://www.newtech.co.jp/introduce/detail/stockmark.html>
8. 変化の波を味方に！「2025年の崖」で製造業が直面する課題と対策, 11月2,2025にアクセス、<https://www.techs-s.com/media/show/266>
9. 【2025年最新】製造業が抱える7つの課題と解決策：中小企業が生き残る道 - DXみらい研究所, 11月2,2025にアクセス、<https://www.satfaq.jp/dx-column/manufacturing-issues/>
10. 特許調査とは | 効率的な進め方を徹底解説 - エムニ, 11月2,2025にアクセス、<https://media.emuniinc.jp/2025/05/30/patent-research/>
11. 特許調査/分析コスト99.9%削減は製造業に何をもたらすのか - エムニ, 11月2,2025にアクセス、<https://media.emuniinc.jp/2025/09/25/ai-patent-analysis-impact/>
12. 製造業向けAIエージェントAconnect（エーコネクト） | ストックマーク株式会社, 11月2,2025にアクセス、<https://aconnect.stockmark.co.jp/>
13. 生成AIのリーディングカンパニーへ - ストックマークの新たな挑戦とは - | rintatsu - note, 11月2,2025にアクセス、<https://note.com/rintatsu/n/ne35154072c92>
14. ストックマーク株式会社（情報通信業）, 11月2,2025にアクセス、<https://growth-100-oku.smrj.go.jp/companies/pdf/00299-00.pdf>
15. Company | ストックマーク株式会社, 11月2,2025にアクセス、<https://stockmark.co.jp/company>
16. 毎日の情報収集がこんなに変わる「言葉のAI」で日本企業の進化を後押しストックマーク, 11月2,2025にアクセス、<https://techblitz.com/startup-interview/stockmark/>
17. ストックマーク株式会社 - STORIUM, 11月2,2025にアクセス、<https://storium.jp/organization/f845ef779255136b327b1e7ee33595bf>
18. 「シリーズB資金調達完了！CEOインタビュー～前編：成長を加速させるフェーズへと突入！」 - CEO・林達 - Wantedly, 11月2,2025にアクセス、[https://www.wantedly.com/companies/stockmark/post\\_articles/325688](https://www.wantedly.com/companies/stockmark/post_articles/325688)
19. ハルシネーションを大幅抑止。ストックマークが1,000億パラメータ規模の独自LLMモデルを公開, 11月2,2025にアクセス、[https://aismiley.co.jp/ai\\_news/released-stockmark-100b-proprietary-lm/](https://aismiley.co.jp/ai_news/released-stockmark-100b-proprietary-lm/)
20. Patentfield | AI特許検索・特許分析・特許調査データベース, 11月2,2025にアクセス、<https://patentfield.com/>
21. 特許調査支援サービス「PatentSQUARE」 | Panasonic, 11月2,2025にアクセス、<https://www.panasonic.com/jp/business/its/patentsquare.html>
22. 特許調査を10秒で！AI特許検索で研究者の特許検索を強力にサポート～AI特

許調査 R&D での活用例 - Tokkyo.Ai, 11 月 2, 2025 にアクセス、  
<https://www.tokkyo.ai/pvt/notice/r-and-d/>

23. Tokkyo.Ai プライベート AI 特許, 11 月 2, 2025 にアクセス、  
<https://www.tokkyo.ai/pvt/>
24. 市場調査に AI を活用するメリットとおすすめツールを紹介 - sellwell(セルウェル), 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://sellwell.jp/column/marketing/utilizing-ai-for-market-research/>
25. 生成 AI を活用した競合分析のやり方 | 無料ツールで始める市場調査, 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://infinitecompany.co.jp/column/generative-ai-competitor-analysis/>
26. 徹底比較！AI リサーチツール 8 選【2025 年最新版】精度・価格など徹底解説 - aidiot, 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://aidiot.jp/media/ai/post-8621/>
27. ストックマーク, 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://stockmark.co.jp/>
28. ストックマーク | Work | Goodpatch グッドパッチ, 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://goodpatch.com/work/stockmark>
29. セレンディピティは、つくれる。情報を起点に広がる artience ..., 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://stockmark.co.jp/cases/artience/>
30. 幅広い事業領域の情報を素早くつかみ、研究テーマの検討が増加 ..., 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://stockmark.co.jp/cases/resonac/>
31. Aconnect の導入で情報収集・共有を活性化。不確実性の高い将来を ..., 11 月 2, 2025 にアクセス、<https://stockmark.co.jp/cases/tdk/>